

令和元年6月10日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02345

研究課題名(和文) 奄美における文化のメディア媒介的な伝承・創生とアイデンティティ再生の研究

研究課題名(英文) Study of the modern transformation and the role of media about Amami Culture and the identity formation.

研究代表者

加藤 晴明 (KATO, Haruhiro)

中京大学・現代社会学部・教授

研究者番号：10177462

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：奄美文化、とりわけうた文化のメディア媒介的な伝承・創生について全体像及び各論を成果としてまとめ単著の形で公刊した(『奄美文化の近現代史』)。具体的には、地域のメディアが文化復興に果たす役割について、コミュニティラジオや音楽産業に焦点を当てて論考にまとめた。奄美の島唄・新民謡・ポピュラー音楽とメディアに関する出来事史を、「奄美のメディア・文化年表」として作成し公刊した。従来の文化研究の方法論を徹底的に再考し、「文化生産論」の奄美への適用可能性について論考にまとめた。「文化生産論」をもとに、奄美島唄の「教室化」・「楽譜化」や「組織化」について実証的に検証し論考にまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の最大の学術的意義は、奄美のうた文化・身体文化を対象にして、現代的な視点からその継承と変容のメカニズムを解明した点にある。具体的には、メディア媒介的展開という視点から、そうしたメカニズムを解明した。さらに文化研究の方法論を包括的に再考し、「文化生産論」の有効性を確認した。「文化生産論」の具体的な事例として、奄美島唄の担い手に着目し、「教室化」「楽譜化」や「組織化」という社会的しくみを解明した。

これにより、古い文化の原像や本質の収集に終始している従来の民俗文化研究や、地域の民俗文化と断絶し、都市・若者中心の日本のポピュラー文化研究の狭隘を乗り越えることができた。

研究成果の概要(英文)：We published some articles and a book about a modern change of the Amami music culture. Our viewpoint is media-mediation about the tradition and new creation of culture. The title of the book is Contemporary History of the Amami Culture. In the book, We discussed it about the role that the local media achieved for culture revival. The example of the media is community radio and music industry. In the book, We summarized Amami Shimauta (Folk song of Amami Islands), a modern folk song, popular music and the history of the media in a list.

In addition, We considered the methodology of the past culture study. We discovered the theory named Culture Production Theory. Based on the Culture Production Theory, we studied the social structure and leading figure of the folk song of Amami and announced it as an article. . . Specifically, we studied the classroom of folk song and organization of the folk song singer.

研究分野：文化社会学

キーワード：奄美島唄 奄美民謡 地域メディア 地域文化 文化生産論 音楽産業 民俗芸能

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

民俗芸能をめぐる奄美の文化研究は、戦前から今日まで多くの蓄積がある。そうした奄美の民俗芸能・伝承文化の研究は、伝統的な芸能の原像・内容の発掘に終始することが多かった。あるいはそうした本来の文化の伝承が危機にあることの指摘にとどまっていた。奄美の文化研究の場合には、中心の一つが「奄美島唄」に関する研究であるが、この領域ではすでに10冊以上の専門書が出版されている。しかしその多くは、島唄の文化内容の解説学・分類学であった。

こうした従来の研究に最も欠けていたのは、伝統文化の今日的な伝承・創生の「担い手」や、ひろい意味での社会的しくみを媒介にして、それらの文化が変容しつつ新しい姿で創生されてきている姿の研究である。つまり、既存研究では、現代の視点から文化を読み解く視点が欠落していた。こうした民俗芸能・民俗文化の現代的な転換であるメディア媒介的な継承と創生の現象は、芸術学はもとより、民俗学や文化社会学でもほとんど調査・考察されないうえに、最近では、観光学のような学問が、逆に地域の観光資源を発掘する視点から、地域の伝統文化のメディア化・コンテンツ化の研究を開始している状態である。

本研究では、民俗文化研究の蓄積を踏まえつつも、従来の研究の狭隘さを超えるため、メディア文化研究者と人類学研究者・民俗学研究者が交流することで、研究の目的で述べるようなメディア媒介的な展開や身体文化というコンテクストという二つの方向で従来の研究の拡張を目指した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、地域固有の民俗芸能・大衆芸能の宝庫ともいえる奄美を対象に、うた文化から余興芸能にいたる身体芸能文化の今日的な展開とそれが地域のアイデンティティ再生に果たす役割を研究することである。そのために以下で述べる、(1)と(2)二つの方向での研究の拡張を企画した。

(1) メディア媒介的な継承・創生の視点の導入：たとえば島唄の録音メディア化、大会化＝ステージ化、産業化、教室化といった事態は、むしろ伝統文化のメディア媒介的な伝承・創生であり、ある意味では伝統文化の現代への対応と創生の姿である。

地域の文化は、今日ではひろい意味でのメディア化(録音メディア化・大会イベント化・コンテンツ化・産業化など)を梃子として伝承・創生されている。そうした文化のメディア媒介的な伝承・創生の実践は、同時に地域のメディア(奄美の場合にはラジオやケーブルテレビ・新聞など)と結びつくことで、若い世代のなかに文化への覚醒を産み出す。それは現代的なローカルアイデンティティの再生でもある。伝統的文化を濃厚に残す奄美では、こうした変容が急速に進んでいる。

本研究は、民俗芸能・民俗学・メディア文化学といった異なる領域の研究者がチームを組み、従来の民俗文化研究にメディア媒介という視点を導入することで、民俗芸能・大衆芸能・メディア文化研究の戦線拡大を目指した。

(2) 身体文化という広い文化コンテクストから奄美の文化活動を捉えていくこと：地域文化・民俗文化を狭い芸能・芸術の範疇ではなく、生活のなかでの人びとの身体表現活動、表出活動として捉えていく。たとえば、奄美のうた文化は、舞踊・余興といった人びとの生活のなかの身体表現というひろい文化的コンテクストのなかにある。今日の奄美の奄美歌謡曲や奄美ポピュラー音楽の文化的苗床にもなっている島唄は、単に歌

謡というジャンルとしてあるのではなく、生活の余儀・余興という文化コンテクストのなかで継承・創生されてきた。その意味でも、うた・踊り・余興を包摂する身体にかかわる表現文化コンテクストという視点を取り入れることで奄美の文化をより総合的に見ていくことが可能になる。

3. 研究の方法

基本的にはインタビュー法と参与観察法である。その際に、ライフストーリー法を援用して、担い手像をより深く理解することを試みてきた。資料に関しては、記号分析を試みた。具体的には、以下の四つの方法を組み合わせた。

- ・奄美群島における（大島・喜界島・徳之島・沖永良部島・与論島）における身体文化の活動域の状況、文化媒介者の配置状況の把握（総合性の確保）
- ・現地の唄・音楽・舞踊・余興に関わる文化媒介者への個別インタビュー（担い手像と実践の把握）
- ・現地の芸能・文化イベントなどへの参与観察（リアリティの確保）
- ・文献資料、音源資料の収集と、文献や音源をめぐる記号分析（言説研究）

4. 研究成果

奄美文化、とりわけうた文化のメディア媒介的な伝承・創生については、全域までは到達していないが、かなりの部分で成果をまとめることができた。また文化年表についても、第1段階のとして「奄美のメディア・文化年表」を作成・公刊することができた（2017年度、『奄美文化の近現代史』339～345頁）。身体文化のコンテクストにかかわる研究は、研究期間の3年間ではまだ十分な到達点に達することはできていないが、部分的には研究成果に盛り込むことができた。また単なる実証研究だけではなく、文化研究の方法論を徹底的に再考する中で、新しい文化研究の理論である「文化生産論」の奄美への適用可能性について包括的にまとめた（2018年度）。「文化生産論」は日本の文化研究が十分に発展させてこなかった理論であり、かつ、この理論を地域の文化研究、とりわけ民俗文化の現代的な展開に適用した研究は皆無である。この点でも、本研究は、従来の奄美文化研究に新しい成果を加えることができた。

3年間の研究成果を要約すれば次のようになる。

(1) 初年度にあたる2016年度は以下のような研究成果を得た。

うた文化、余興文化、芸能について、メンバーそれぞれが必要に応じて、奄美・東京・大阪などの奄美関係のイベントや文化の担い手への取材を行った。また奄美のうた関係者への取材は、奄美大島だけでなく、徳之島、沖永良部島、与論島にいたる範囲で実施してきた。沖永良部島・与論島は、ほぼ全ての唄関係者への第一次の取材を終えることができた。奄美のうた文化の継承と発展については、その包括的な概要を『奄美文化の近現代史～生成・発展の地域メディア学～』にまとめることができた。とりわけ、唄・音楽イベントとそれを通じての島アイデンティティ形成の推進者＝文化媒介者であるあまみエフエムについて詳細な研究をまとめた。また、島唄・新民謡・奄美ポップスをめぐる奄美関係の音楽産業についても、詳細な論考にまとめた。また、島唄文化については、龍郷町で開設された「奄美・龍郷 島ミュージアム」の島唄パネルの執筆を担当し、研究成果を地元に戻した。

また、社会調査実習の学生を指導して、録音メディア化された奄美の歌文化を対象に、歌詞分析も進めてきた。そうした中で、最近の奄美の歌謡が、アイデンティティ・ソ

グの側面を強くもっていることを解明した。

(2) 2年目の2017年度は以下のような研究成果を得た。

現地での取材調査と資料収集・文献収集を続けた。「奄美新民謡・奄美歌謡」の社会的世界を長く担ってきた3つのファミリー(山田サカエファミリー、久永美智子と夕月会、米倉ファミリー)への取材を繰り返してきた。また奄美と沖縄の歌文化の比較のために、沖縄市の音楽村の資料コーナー取材や沖縄の地元レーベル(キャンパスレコード)関係者、音楽批評雑誌(「沖縄音楽旅行」)関係者への取材を行い、比較研究を進めてきた。また沖縄の民謡・新民謡の代表的な音源の収集も行ってきた。

奄美シマ唄では、著名な唄者(松山美枝子氏・川畑さおり氏・菅沼節枝氏等)などへのライフストーリー取材を続けてきた。

研究成果のまとめとして、『奄美うた文化の近現代史』(2020年発刊予定)の出版に向けての執筆作業を進めた。具体的には、1章の方法論(文化研究の方法論)にあたる部分を執筆した。70ページにわたるこの方法論的な考察により、奄美島唄のメディア媒介的展開についての理論的な基盤を確立した。論考では、「文化の生成と発展のための表出の螺旋モデル」を提起した。こうした文化研究の理論・方法論の精査により、文化媒介者、メディア媒介的展開、など奄美のフィールドから発見した諸概念が、普遍的な理論モデルになりえる可能性を提示することができた。

また地元あまみエフエム10周年祝賀会や地元写真家浜田太氏の国際賞受賞記念会での講演講師を務めることで、研究成果の地元への還元に努めてきた。

(3) 最終年度である2018年度は、以下のような研究成果を得た。

研究期間の最終年度であるので、奄美島唄と余興文化の調査に集中し、取材と執筆を進めた。研究実績としては、島唄の大会については、春に開催された日本民謡協会奄美連合委員会主催の「奄美連合シマ唄大会」、南海日日新聞社主催の「奄美民謡大賞」大会を取材し、さらに奄美島唄研究の第一人者である小川学夫鹿児島純心大学名誉教授と研究交流を行った。6月と9月には社会調査実習の「島唄研究班」の学生に助手として参加してもらい15つの島唄教室への集中的な取材を実施し報告書にまとめた。ポピュラー音楽については、秋に行われた「唄島プロジェクト」イベントへの取材を行った。こうした調査に基づき、研究成果として、「文化生産論」の各論を3本の論考にまとめた。教室化に関する2本と、組織化に関する論考である。

「奄美島唄という文化生産：教室化をめぐって(1)」と「奄美島唄という文化生産：教室化をめぐって(2)」では、奄美群島内の全ての公民館講座の一覧及び4年間の受講者の推移を作表した。こうした研究もこれまで皆無であり、群島の島唄伝承事業の全域がわかる基本資料となった。また龍郷町の島唄教室の講座の長期間の推移もまとめることで、教室化の拡がりを時系列的に解明した。

「奄美島唄という文化生産：組織化をめぐって」では、日本民謡協会奄美連合委員会の創生期の資料と取材をもとに、島唄界が社会的しくみとして整備されてくる過程を詳細に解明した。

録音メディア化、大会化、新民謡、ポピュラー音楽への螺旋的な文化拡張、身体文化、娯楽文化との関係などについては、研究成果としては未着手であり、2019年度から始まる科学研究「奄美における芸能文化のメディア媒介的復興と自尊意識再生の文化生産論的研究」の中に盛り込むかたちで、今後逐次発表していく予定である。

5. 主な発表論文等〔雑誌論文〕(計 13 件)

加藤晴明、奄美島唄という文化生産：組織化をめぐる、中京大学現代社会学部紀要、査読無、第13巻第1号、2019、119-150

加藤晴明、奄美島唄という文化生産：島唄の教室化をめぐる(2)、中京大学現代社会学部紀要、査読無、第12巻第2号、2019、41-102頁

加藤晴明、奄美島唄という文化生産：島唄の教室化をめぐる(1)、中京大学現代社会学部紀要、査読無、第12巻第1号、2018、41-70

川田牧人、書評 江川純一・久保田浩編『呪術の呪縛』上巻・下巻、宗教研究、査読無、391号、2018、178-181

川田牧人、落語と宗教 の・ようなもの、日本常民文化紀要、査読無、33号、2018、67-103

川田牧人、個とマイノリティの験ずる呪術、思想、査読無、1125号、2018、120-126頁

加藤晴明、地域・文化・メディアをめぐる研究方法：文化生産論との対話、中京大学現代社会学部紀要、査読無、第11巻第2号、2018、1-70

川田牧人、現代における感覚とマイノリティの呪術論に向けて、民博通信、査読無、157号、2017、20-21

加藤晴明、メディア学とフル度調査の接合を目指して、社会と調査、査読無、19号、2017、79-85

加藤晴明、「唄う島」奄美と音楽メディア事業、中京大学現代社会学部紀要、査読無、第10巻第2号、2017、71-122

加藤晴明、ラジオの島・奄美、中京大学現代社会学部紀要、査読無、第10巻第2号、2017、1-70

加藤晴明、奄美の地域メディアを俯瞰する：島外メディア編、中京大学現代社会学部紀要、査読無、第10巻第1号、2016、103-168

加藤晴明、奄美の地域メディアを俯瞰する：テレビ放送・ビジュアルメディア編、中京大学現代社会学部紀要、査読無、第10巻第1号、2016、41-102

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 1 件)

加藤晴明・寺岡伸悟、南方新社、奄美文化の近現代史～生成・発展の地域メディア学～、2017、365

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：久万田 晋
ローマ字氏名：Kumada Susumu
所属研究機関名：沖縄県立芸術大学
部局名：付置研究所
職名：教授
研究者番号（8桁）：30215024

研究分担者氏名：川田 牧人
ローマ字氏名：Kawada Makito
所属研究機関名：成城大学
部局名：文芸学部
職名：教授
研究者番号（8桁）：30260110

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。